

越後
譜二編卷之四

目錄

火浣布

土中の舟

兩頭の蛇

石打瞬神

峨眉山下標準

三四月の雪

白鳥
浮島
美人
苗場山
鶴恩報

通計十三條

北越雪譜二編卷之四

異獸

江越戸後

鈴木牧之編選
京山人百樹增修

魚沼郡掘内より十日町へ越す所七里ある村へ、あまざき山中の間道
ありて、ある年の夏の夜、竹助と間屋わらの内の間屋へ自縮
するやうにひきこもる。〔とつひら〕りゆきをもて、日の巻をぐる頃、竹助とよ
助夫をもくろみ、荷物をもくろむし、たけりがくと途も稍く半ふい
まるごろ日、ざつぱりとあち、竹助もくろむるのからくの石ふ腰かけ
焼飯をもくろむる、各間の根籠をかくさむと來る者あり、ちくちくと
を見、猿ふねて猿ゆゑ、頭の毛長く、脊ふねて背び半ハあら
丈ハ常並の人よりは多く、顎ハ猿ふねて赤り、眼大くして光りあり、竹
助ハ心剛き者ゆゑ、用心ひふき、山刀を提げ、射んと身がまへけふ
此より、さる氣色もゆく、竹助が石の上に坐て、山刀を提げ、射んと身がまへけふ

もあつたが竹助はそれを投げ、立派な竹助の顔であった。
竹助心をやめ、又あわてて竹助の顔を拭いて、竹助の手を
我へやるの四十日町へ向かうと、荷物をさげ、
をこなして、四十日町の旅館へ入る。荷物をさげ、
んとせつぶつと荷物を下ろすが、とまづ立てゆ
竹助も、立てゆるのれど、立てゆるが、立てゆ
かのまゝ立てゆるが、立てゆる。竹助、娘の道えりを立てゆる
か、一里半あまりの立てゆる。池谷村立ちゆく。時荷物
を立てゆる。立てゆるのが、立てゆるの立てゆる事風の如く立てゆる。竹助が四十日町の
問屋立てゆる。語り立てゆる。今立てゆる。星今立てゆる。五十歳以
前の事立てゆる。もの頃ハ山立てゆる。立てゆるのを立てゆる。ハ此異黙を見ゆる。
まあとしての前ふひよ池谷村の者の話小我を十四五の時村立てゆる娘

小機の上手あると問屋より、金をもってちりをわざわざおもてなしに來る。雪のまゝのまゝで、肉のゆゑに機を織つてゐるが、肉の外は立てる。さうが猿のやうか、顔赤くさがりの毛長へ、人よりへ大きがりたる者ありたり。此時家内の者へは、おもむく獨りおもひだして、機をかへらすと、機がへりて、腰がまじて、物あつて、心がせんと、おもむくおもむく、やがて、かどりのゆゑに、立たぬと、飯櫃ふ指すを欲せしゆゆの娘也。異歎の事をうなづ聞ひて、お飯を握りて、二ツ三つおひげを拂ひ、ひきこもる。家の人達の時へも、ひきこもる。來りて、飯をもよおふ。後山へ駆けまわる。おまかせをひきだり。○さて此娘、草用のゆゑに、意のちんとをありかねて、折々一月水かかる。御機屋に入り事あり。御機屋の事初年を傳め居て、日限ふ様に娘がまづう双親

此事を患ひ歎きけり月より三日ふあひる日の夕方まで家内のもの農業よりかへざるをもつてあやかの夕方からあくまでも娘人ふありて月のうきひをかづつゝ栗飯をあがへてあくまどきのどくもぐふ立さまどもざりてのむかきゆゑやびとなりさりけりたる娘ハ此夜より月をもととせしゆふ不思議ともすひゆづ身をきよめて御機を織果その父問屋へ持去り往着一とおり頃娘時あづば機ふ紅潮ふきりのあきらめ我が歎きを聞てかのま我を助一さんと聞く人々も不思議のむきひをうけりと語りぞのとく山中あそたまた小見ゆるのもあり一人ゐてす連ある時ハ形を見せどとぞ又高田の藩士材用あくま樵夫をあごづ黒姫山に入り小屋を作りて山小口をうちや時猿ふ似て猿ふあざる物夜中小屋み入りて焼火ふあはりたけふ六尺を下り赤髮裸身通身灰

山中異獸の圖



秋月葦牧之草山

色みく毛の脱るふ似たり腰より下小枯草をも此物より人のゆ
ことかあひのものあひよ人ふ駒一と高田の人のうきに接する和漢三
文圖會寫類の部小飛騨美濃あるハ西國の深山か如件異獸あり事
をある毛りあひの深山あるあひの事

○火浣布

宝曆年中平賀鳩溪源火浣布を創製し火浣布考を著し和漢の
古書を引本朝未曾有の奇工小説より役して其術つらび好事
家の憾事ともあらず小我が嘗火浣布を作の石を産そその在る所を
金城山。卷機山。苗場山。八海山。その外あるありその石軟弱し而を
りて石を打て木の軟弱石ありりて青く黒一寸をもばくバ
石綿を出そ此石を得て試し石中ふ在る石綿とり木の木綿とを
細く袖を三分やぶちゆるゆるのあり是を纺績するが祕術
あり火浣布を造る其機術を得バ小女子も火浣布を織る
○また我驛中小糸荷屋喜右門とのての石佛を纺績する事か千思
万慮を費し竟自らの術を得て火浣布を織り又其頃我達
村大澤村の医師黒田玄鶴も同様火浣布を織る術を得る各
紹し。その術を入れ傳へざるが一時まで村づにあらず火浣
布の奇工を得る。一奇事なり星文政四五年的間の事なり此兩
人の説をきく。力をつゝが一丈以上あるをも織うべくあはせ其機工容易
あはせと。平賀源内ハ織を五六尺過ぎと火浣布考より。里主玄鶴が源
内がまき。事ハ玄鶴ハ火浣布の外火浣紙火浣墨の二種を造
り火浣墨を以て火浣紙の物を烈火炙りて火とあつてをあ
ふ。火氣をもどぐ紙を穿き。其實用
をひバ火浣布も火浣紙も火災の供あひ憑ぐべく。ひんとあひ火引

○また我驛中小糸荷屋喜右門とのての石佛を纺績する事か千思
万慮を費し竟自らの術を得て火浣布を織り又其頃我達
村大澤村の医師黒田玄鶴も同様火浣布を織る術を得る各
紹し。その術を入れ傳へざるが一時まで村づにあらず火浣
布の奇工を得る。一奇事なり星文政四五年的間の事なり此兩
人の説をきく。力をつゝが一丈以上あるをも織うべくあはせ其機工容易
あはせと。平賀源内ハ織を五六尺過ぎと火浣布考より。里主玄鶴が源
内がまき。事ハ玄鶴ハ火浣布の外火浣紙火浣墨の二種を造
り火浣墨を以て火浣紙の物を烈火炙りて火とあつてをあ
ふ。火氣をもどぐ紙を穿き。其實用
をひバ火浣布も火浣紙も火災の供あひ憑ぐべく。ひんとあひ火引

遇ハ俱ふ火とあり人あり火中より出でて火と俱ふ碎け形を以
きふた灰とありるのとなり觀具も用ひず所ある。源内
死し奇術絶す。小舟の兩人ひし火浣布の機術再世なり。小
鳴呼可惜此兩人も術をつゝぞ。後一時火浣布をびせふ絶
うかの源内ハ江戸の饒地火浣布を纖じ。其聞え高く。有
二人ハ越後の辟境火浣布をもつて名其名低。之はある
く好事家の一話小供す。

○弘智法印

弘智法印ハ児玉氏下總國山東村の人あり高野山ふゆり。密教を
学び後生國ふ皈り大浦の蓮花寺ふ住。行脚して越後ふ來リ三
嶋郡野積村里言海雲山西生寺の東。岩坂との所。錫をもてて草
庵をもとぶ。貞治二年癸卯十月二日此庵ふ寂せり。辭世と云

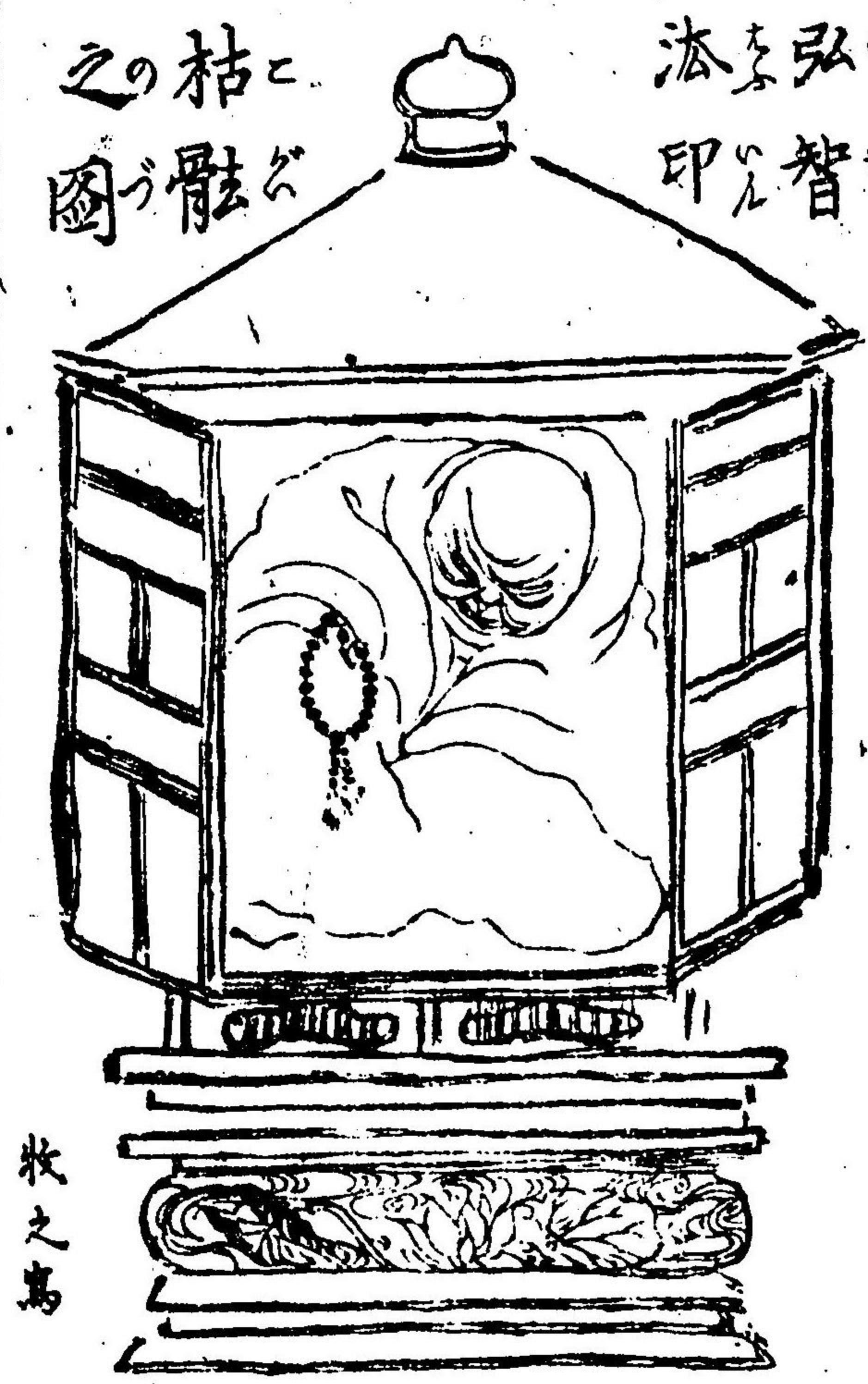
ロ碑あつた。哥ふ山石坂の主を誰ぞ。入間を墨繪小書。松風の音
遺言あり。死體を不埋。今天保九をも。事四百七十七年ふり
り。枯骸生る。如一星を越後丹波奇の一小數此事雜書。先も散見をも。圖とのぞみの。やがて圖をとふ。此圖
ハ余先年下越後があそび。時自擊たま。所あり見て所て面
部のみ手足ハ見えど寺法あり。て近く觀る事。をやう。閉眼
鍼はり。或て眠ねむ。如一頭巾法衣。まほのまへ。あらわす。是
是。也。國々聞ぎる越後の一奇跡あり。

百樹曰。唐王も弘智ふ似。事あり唐の世の僧義存没。と
の。アを胸中ふ置。毎月其徒。とをめ。丸巻の長。を剪
蘿常。を。百余年を。經。も廢せ。が後国。も。れ。る。ふ
因て。こ。を。火葬。と。又。宋人彭乘。が作。墨客揮塵。ふ

別列の僧元慶も戸を不埋丸髪の長下義存ふ同トか

婦人の手ふ摸らむ

弘智
添印



よき丸髪のひざむ
とせ車ハ五雜組小
記て枯融の確論あ
毛どす新氏を詰る
似する説ゆべども
贊せど存々夏あ
詳究せを

○手中の舟

蒲原郡五泉の在一里を下新田との村あり或年此村の若年更
ある阿加川の岸を掘りかずより長さ三間を下の船を掘りぬ
全体少一丈腐也形今の船小異るのいかゞ金具を用うべき處のみ
鯨の鬚を用ひ一寸鉄をまわどて一木もまこ何の木のみを
弁する者あらずそくハ異國の船あると云ふを余下越後小遊び
一時杉田村小野佐五右衛門家あらかの船の木ひく作りたる硯箱を見
し小木質漢産ともかく上古漂流の夷船也あらん

○白鳥

前より如く雪譜と題きの小他事をらひ六哥ぶり落題され
ど雪ハまじ未ひづべ一姑くもひづべ不まると○天保三年辰四月
我が住塙澤の中町小鍵屋某が家のやうか喬木あつ此樹小鳥巢を
むちび雛稍く頭をひそむと白き頭の鳥を見る主人怪一と
人を一々是を捕ひ小全身ハ鳥小へて白く紫眼足ハ赤き鳥の雛
あり人へ奇とて集り觀る主人俄小籠を作り心を盡して養ひ

が長じて鳴音も鳥の異なれど我が近隣の山に朝夕と聞かる
奇鳥ありと云ふ人多しくは反へ出へて觀物せんかじりて有る
主人を一見してやうがわく其冬雪中からて山の鷹狩りと餌小魚く
人家ふきて食をねむる事雪中の常なる此の所為ある筆
いゆべて白鳥ハ羽毛の様の下がある」と初編は白熊の事を載
たるゆゑ白鳥をまじへて記す

○ 雨頭の蛇

文政十年亥の八月廿日隣驛六日町の在余川村の農人太左門の軒端
小雨頭の蛇りて手を拂ふ長さ一尺ふたほどその頭二つ並び枝をあそ
のうづきながら常の蛇がうづきあひまきに枝を箱ふと餌と
らむと一ノ三日を経ての間一やわらぎをだすと一ノ三日をも
ざり一とど

○ 浮嶋

小千谷より西一里小芳谷村となりあつて不都殿の池と曰方三町斗
の池ありて浮嶋十三あつ晴天風の時日出ニバ十三の小嶋ある
難散クミ一池中少遊ぶが如一日入る池の正中少遊ぶを「の嶋」とある
此池の奇異あるとて立多たる御神の浮嶋カモの名記
一人の知る處など此うれしき事人知る

○ 石打明神

小千谷の内農人某の地面一小社あり石打明神と云ふ昔より祀る处也
その縁起は聞りてせり贅肉ありの此神をひのく小石をひのいがを
撫社の縁の下の簾子の内(枝の籠)小石ありて御神の浮嶋カモの事
奇妙なるとて立多たる小石の形ありて人の圓も
立多たる圓石と云ふ又奇妙な事の外とば社の下の大小の

國石満もさう。○百樹曰余も小千谷ふ遊び時此石を視て詰柄木
一ツ持帰んとせり。尔所の人のいふ云此神是石を惜み玉をとらひゆきと
きて取るをゆきの如く。つゝく視する。數万の石人の磨き
る玉のども。凡神妙ハ肉知を以て測る。

美人

がすのあめゆるもつゝー。一十六七の娘三人が、柴籠カゴをせちひ山
をのぞて、とふまく、のむかへん。のつて、まつりをきく。余、
山水小目を奪ひ、とひふ火アラシをかく。まきよし、煙管パイプを、よせつる顔を
見え、蓬髮素面ボウハスムダ、天質の艶色花アヤシキハナをもひ、玉タマみ比ヒミツび
百結の鷦衣セキイ、比趙璧ヒショクベツを羅ラフむ。余愕然ヨガクジヤク、山水を棄て此娘を視ミ
一楫イチヂク。去り樹の下の草シダふ坐スル。一をうげざウゲザ、せまほの火アラシを
うつし、も坐め三入ミトメひと。吹烟双無塙獨ツシマツシマの西施と語ハシマツシマ、兼葭
玉樹エシキ、ふより、如く皓齒カクシ、燐爛リュンランと、白芙蓉の水ミズをひで
微風不搖ソウヤウ、嗟乎惜アハシムべ。かく美人も是邊鄙ハシマツシマ、尔生アリス也。簪
庸頑夫ヤラクの妻トメ、巧妻常コトメノリタニ、小拙夫アリス不伴アリス、眼アリス、荆棘キシキと俱アリス、
腐アリスらん事アリス憐アリス不堪アリス。若紅戸アリス、朱門アリス、小解語アリスの花アリスを開
あひハ又清樓アリス、小拙泉樹アリスの榮アリスをう。此隣國出羽アリス、小生アリス。

○百樹曰余も小千谷ふ遊び一時此石を視て詰柄不
一ツ持帰んとせ一ふ所の人のうへ此神是石を惜み玉とひづて
きて取るをゆめぬ處にて視てふ數万の石人の磨き
する玉のどり一凡神妙ハ肉知を以て測べ

○美人

百樹曰小千谷の因ふ余小千谷の岩居が家ふ旅宿也一時天保七年八月
或日筆を採小倦山水の秋景を觀たゞて獨歩の道小千谷の前
小流より川小臨岡下のびて用意一ぐる書をくゝ毛禮を老樹の下小
舟に烟を吹きせつ眺望の引舟ハ浪小遙りくらうどんづねが如く下る
群木ハ少しく霜を染て紅く連山ハ僅か雪を戴き白く寒
國の秋景江戸の眼を新ふ

ぞ一ぐれむわふるをくーも十六七の娘三人が一柴籠をせひ山
山水小目を奪ひてふ火をかく火薙をすててよせする顔を
見せば蓬髮素面にて天質の艶色花よひ玉ある比をば
百結の鷄衣比翼璧を羅む余愕然一山水を棄て此娘を視る
一揖して去り樹の下の草小壁一とあをうづづ一せむるの火を
うづづむをめ三入ひて吹煙双無燭獨の西施と語るハ兼葭
玉樹ふよぶ如く皓齒爛爛とくらは白芙蓉の水をひぐ
微風不搖がどと一蹉辛惜一かく美人も是邊鄙ふ生を唇
庸頤夫の妻となり巧妻常小拙夫ふ伴をく眠り荆棘と俱ふ
腐らん事憐ふ堪うり巧妻常小拙夫ふ伴をく眠り荆棘と俱ふ
あらハ又青樓小搖泉樹の榮をう一此隣國出羽ふ生をく

小野の小町が如く美人の名をもつて此美人を此僻地小出
す。天公事を解きまふ秋より獨歎息へ言ひて娘むすめ
來とてあび柴籠しばらうをまひうらつゝ立たつけり目送みぞれ
顧越後おほの美人多々と人の口實くじふらはう。是無他なき水
ふよるゆゑかの織物おりものの清白きよしらへ。越後の白縮しらしゆくふ勝まさ
きことよきこ此邊ハ白縮しらしゆくを産うぶす所あり以て其水の至清きようる
をあひ。江河潔清せきせい。女めの佳麗かれい多々と謝肇淪せあつりんがりゆる
理ことありとおりひつ旅宿りゆしゆふ帰かへり云いの事こと。美人を視みたりと岩
居いわゐふ語ごりけどば岩居いわゐの渠きハ人の知し美女めいじょ。先生を他國ほかのくにの
人ひとと眼解あきせ。たゞの火を借うける可憎からず。一
吾われたゞの火を借うけて美人ふうんゆうん烟たばこをむかひ。と戯言わざごんひどば岩居
手てを拍たたく大笑おほわらいひ先生誤まちがりうそうそと唇くちびる者ものの娘むすめと聞きく再び
愕然おどろきとく糞壤くそらう妓花ぎはなを出だす。かく事ことあぞらひ。ふる。
○再按あくまでも小野の小町ハ羽州はしゆうの郡司ぐんじ小笠おがさの良實よしのぶの女めの。楊貴妃ようきハ
蜀しょく州しゆうの冠くわん戸と元王げんおうが女めの。和漢俱とも北国きたくにの田舎娘ぢやうむすめ。不美人の名を
つづく。地方ぢほう小佳人こせうじん。あくとひも北きたハ陰位いんゐ。女めの不美ふび麗れいを出だす
。あくとひも二代目の高尾たかおハ野野のの川がわふ生うぶ。初代の萬雲まんうんハ信州しんしゆう不產ふさん。と
とく北きた郡ぐんふ名なをうせり。越後えちごふ件くだんの美人を見みる。北きた国くに
見みた。かの木きとひが熟じゅく視しふ。娥眉がめ山さん下した喬きょうとひが五大字ごだいじ刻く。あり

○娥眉山下橋柱

文政八年乙酉十二月菊羽郡きくは越おほ推谷すいの漁人ぎじ。推谷すいの漁人ぎじ。ある日推谷すいの
海上うみふ漁うみ。一木いつの流なが見みて薪いのしふせふせ。拾あつひ取とて家いえふ
くく水みずを乾かさんとく。底そこふ立たつ寄よ。を推谷すいの好事家こうじや通りかく。是ぜを
見みた。かの木きとひが熟じゅく視しふ。娥眉がめ山さん下した喬きょうとひが五大字ごだいじ刻く。あり

しをのづかの國の物とすひ漁人ゆく薪をうへむひうづかるとぞ
さて余が旧友觀庵上人ハ推谷吉田次村淨土宗祐光寺強学の聞えあり嘗て好事の癖
あるを以てかの橋柱の文字を双鈞水刻して同好ふがう且橋柱が題
もす吟詠をどひ是も又梓かして世ふ布んとせむ一故あり
不果うの橋柱ハ後ふ御領主の御藏とす一とぞ推谷ハ余が同国より
ども幾里を隔てて其眞物を不見今ふ遺憾とぞ姑傳寫の圖を
以てこらふ載つ。百樹曰牧之翁此草稿ふのをう畠を見まかづくもす所有
百樹曰ア阿上人が和哥の友相場氏ハ推谷侯の嚴人ときてと上人
の紹介をゆづり相場氏が對面一へ件の橋柱の事を尋ねし
余ふ謂へ橋柱みわづ標準ありとぞ俗ふ書輪帝とよぶ物
ふ作りてを出へ其圖を示さる余が友の画人千春子が眞
物を傍ふおもて縮圖す 峨眉山下齋といふ五字ハ相場氏
三づう心を深めうつむきとぞ 下木園もと
左の木顧せちの下ふ五字を彌フタハ墨すり左り峨眉山下
橋うりと人ふを標準ありとぞ是も美人理
喚然うり今俗ふ指を多用ひてものあひをへゆる所を記
ふるを聞る事あり和漢の俗情もとて事あり。とて此標準
を得る實事をみて北海ハうづきの所も多めにいはば常
北風烈々磯へ物をうちよむる推谷ハたまのふとが一と所
ゆゑ貧民拾ひ取つて薪とのを事常あるが文政八酉の
十二月例の如く薪を拾ひふ出へふ物あり一柱のじゆく浪ふ漂ふ
をいふが人の頭とみゆる物も甚先思ひ貧民等惧き
かりのうづから見居てか此の竟不磯不うちあがむを
見て人へ立よむたるふ文字ハあれども讀者うへ是ハ何ゆ

峨眉山下齋

小入る是水路日本道五百里をかりて其の標準洪水をや
水ふへりん。洞庭。赤壁。潯陽。楊子の海の如き四大江を蕩漾周
流。而も航況を留し一水路五百餘里を流はれ。東海に入り巨濤小
千倒。一風波万顛を起す。断折碎粉せど直身挺然として。我
國の洋中。小漂ひ北海の地方へ近より。椎谷の貧民ふ給ひて始く
水を辟き。既に一燼の薪となり。幸ふ字を識者ふ遇ひて死灰を
椎谷侯の縫を奉じ。身を宝庫小安ん。万古不朽の洪福を
保つ。更奇妙不可思議の天幸。と。寶小稀世の珍物あり。

繪圖左のビ

篇一丈餘。幅二尺五寸餘。木質弁名。べ

さんとまゆ。許ト居るをうへ。かく近き西禪院の童僧
通り。かく唐詩選。かくがたの峨眉山の文字を讀んで。唐土の
物か。と見て。貧民拾ひて持つて。かねば唐土の物と見て。薪ふ
せど。かく此事。開傳。かく竟ふ主君の藏。と。語。

○按。ふ峨眉山ハ唐土の北。在。峻岳也。富士。ふ。峨眉高山
。かく絶頂の峯双立。八字をあまゆ。峨眉山。とりて。此山の
標準日本。の北海。其水路を。詳究せん。と。唐土
歴代州郡沿革地圖。ふ。檢。清國の道程圖。中。を。檢。ふ。峨眉山
ハ清朝の都を距。こと日本道四百里許。の北。在。此山。か遠。そぞ
一條の大河。東。ふ。流。峨眉山の麓。の河。皆。此大河。ふ。入。此大河
瀘州。を。流。三疎。の。よ。と。遇。江漢。ふ。至。荆。州。ふ。入。洞庭湖。
赤壁。潯陽江。楊子江の四大江。ふ。通。江。江南。を。流。涸。り。東海。

歷代州郡沿革地圖

清國の道程圖

中

檢

峨眉山

登曲場山之図

丁廿

宵間薄霧湿衣中
寒露早暮四金移

呼吸極き通帝座
徘徊却愧向天人

吐息毛雲と身

かく舞葦の秋

川曲千利信

黒文

秋林

秋山



按もる小城城同韻五何友もとが相通じて往々書見を橋を齋小
作る頗る異体なり依て明人黃元立が字考正誤清人顧炎武が
亭林遺書中小在る金石文字記あるハ碑文摘奇之一
あるハ楊霖竹菴が古今疑中の中字跡の部うど通卷一遍搜
索もとすとぞの齋の字す。城眉山のある蜀の地ハ都を去る事
遠き僻境うり推量するが田舎の標準あるが学者の書つてゐ
あるがくす俗子の筆すべからざり我今之俗竹を竹と云ふ誤
の類う猶博識の説を俟つ

○ 苗場山

苗場山ハ越後第一の高山うり。魚沼郡小登り二里との絶頂小天然の苗
田あり。依て昔より山の名不呼うり。峻岳の巔小苗田ある事甚奇あり
余其奇跡を尋んとて事年あし。文化八年七月偶もひたまつて
友人四人。嘯齋・擴齋・從僕等小食類其外用意の物をもとを同月五日
未明小なちりて其日ハ三ツ候とて驛宿次日晚を侵して此山の神職ミツル
りひりかへ。被をか。案内者を傭ふ案内ハ白衣小幣を捧げて先ふ
も清津川を涉りて左より藪ふり。峠道を踏め路を登る。小樹樹
木列して日を速り山篠生ひ茂りて徑を塞ぐ。老樹折れ。路可
横り。うるを踰る。卧竜を踏ふ。一條の溪河を涉り猶登る事半里
許右不折え。左も左より曲りそのびる奇木怪石千態万状筆を以
てらむ。已ふ半途ふり。鳥の声をもきづ。殆東西を弁て
道のまこと。案内者によく知りてさへ。もと山篠をかゝけ。幣を
あげて立ちを示す。藤蔓笠をまとい。叢竹身を隠す。石高く
徑狭く一步も平阻のまつをあきだ。午を下す頃山の半ぶり。す
僅の平地を得て用意する卧座を木簾もあきて食をあ。暫く

憩ておひのやかへと神樂岡へ向ひて山を越すより他木さうふ
かく俗ふ唐松とのすの風ふたけの木の根は雪霜に被り枯れん
低き森を下へて山へとあわせまじる山の木へと御花園といふ
所山極盛、ひき百合桔梗石竹の花あざめのさゑ人の植やさすふ
名をあへがる異草わまきあつ案内者か問ひば薬草ありとゆき
のがれゆき機鬱る道あわて岩ふき竹の根を力草と
一步か一聲を發して氣を張り汗をぬぐ一千辛万苦のがれと
馬の背とひそむ左右ハ千丈の谷あつまも所僅ホ二尺一脚をあ
まの時バ身を粉碎ふるモハ忙怕あゆみて竟不絶頂ふじてゆき
○儲同行十人まづ草ふ坐て憩ふ時已ふ下肺かづき案内者の
ゆきへ登り二里の険道をひび一日か往來をまことひぞ絶頂不あら小屋在
こぶのぎる人波その小屋不一宿もる事あつとりへ今ちの小屋をこねば
木の枝山を枯草かど取りあひてかづき輪輪ひよだりく作られた
シカく笑ふ僕どくに枯枝をひよだ石をあひて假小社をすくひせたる
食物を調せんとあひ水をだめて茶を煎ふ上戸ハ酒の燐をひよだ
をじきを胸至る越後、まことに溪間の櫻をあしらはる連山の眼下ふ波濤を千隈
川ハ白き赤をひじほ波は青き盆石をかづき登の脚筋ハ鐵眉をあへ越前
の遠山ハ青黛をのせむとふ眼を拭て扶桑第一の富士を視ひだせりやの
さく雪の一握りを置き如一人手を拍奇なりと呼ひ妙なりと称讚を平
勝万景應接も小遣あへぞ雲脚下ふ起るかづきが忽晴て日光眼を
射す身ハ天外か在か如一是絶頂ハ周一里との躋へたる平光高抵の所
を不見山の名ふよび齒場となりて所どりとあるやあさる人のほり
さる田の如き中少入の植てうかがふ齒ふ枝なる草生ひて齒代を半と

の如く一月の雪は山の上に積んであると奇かへしがて其田の芋を種まき
あらヒ常の田がお尋ねする所の田水持や山里の巖石此奇跡を觀ること
甚不思議の天山の奥内者ひへへ御花園より御前御内者徑わたりて巖
岩窟とづて所あり處の内引一株の清水あり其の水は古錢多く銭ロ二
掛りありて神を祀るより始斯と云ひてからて今草木が零れ
し無事なるとて此頂のみ石にて御場大権現とあり案内者ハ此石
人作也天災の物とソリ俗傳をばしがと見かざる日をば小屋を内へ
挑燈をえりて外の火を焼そひてじ食をひて酒を
酌六日の月皎々とて此頂にて桂の枝をばいひて
人ノ詩を賦一哥とよみ佛向日吟興をもて時をうへてたゞり寒
氣次第猛烈と用意の棉入も志のむれにて終夜篝火ふあひて夢も
むすびあらぬの心地をばいひて此頂にて御來迎を拜
たまご案内者ひへへて拜所をひへて一日の昇を拜一哥とよみて山
をばいひて別れ把荷あひゆ○百樹曰余越遊○時牧之老人ふせ山の地勢
を委一へて真景の國をも親りて巖の平坦なる苗場の奇異巖岩
窟の古跡など水ある自在の山ノがそへへ上古人ありて此山をひへ
絶頂を平坦なる馬の背の天險をたのむてふ住居一耕作をも
一へるがゆびそのか其靈魂ノがひゞめて苗場の奇異をもかくと思ひ
國史を搜究せし其徵も得てや博達の説を聞ん

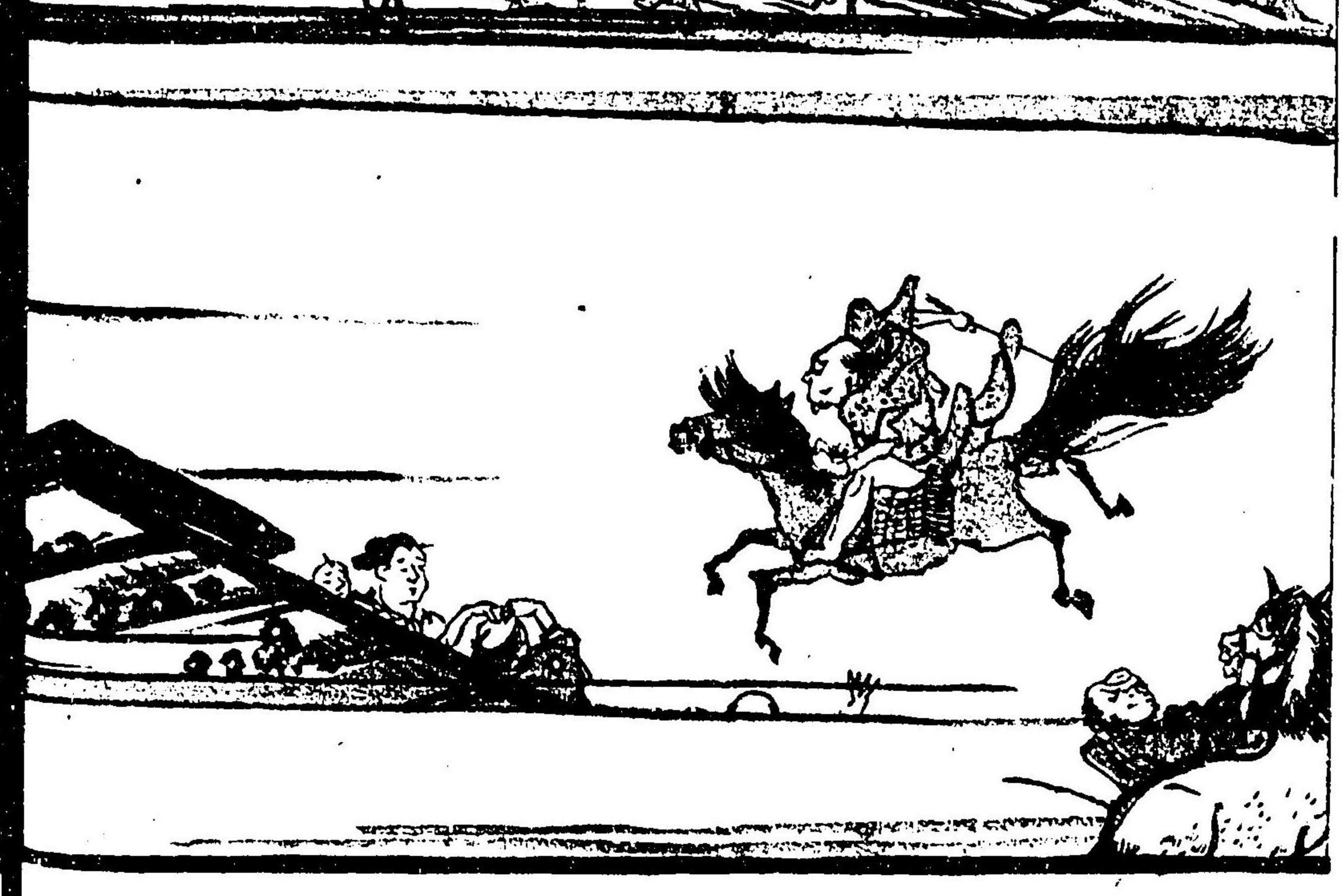
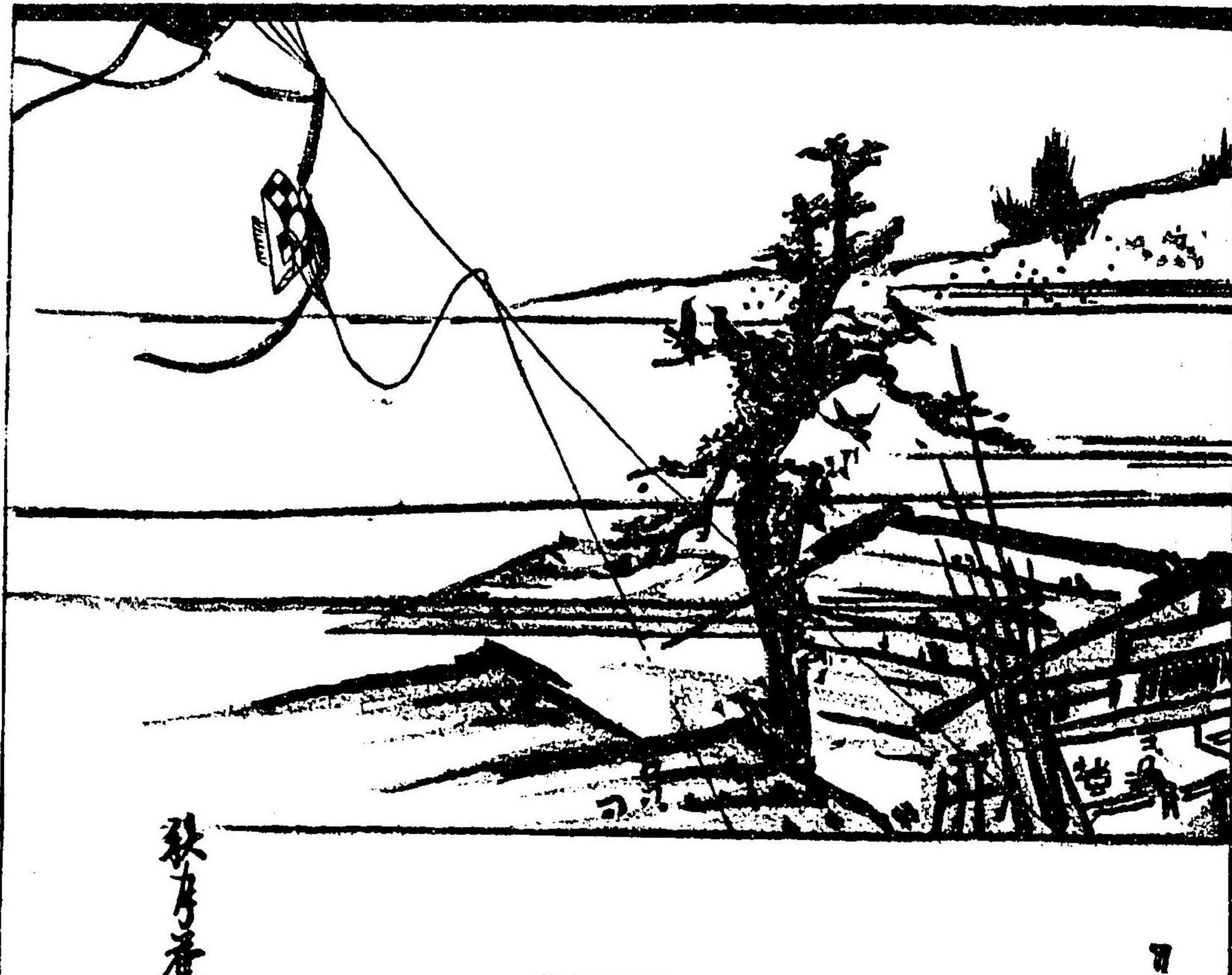
○三四月の雪

我国冬六七の春をも二月頃まで雨降る事少く一雪のふるやゑ
あらべ春の半分は雪の事少く日わり此時がひへて晴天がひへて雨
ふる風かむ去年より積雪がひへて水道がぬけて往びる家庭はひへて乾井
北東ある方へさゆる事かへての雪が里地よりの雪の度かとひへて

市中四月雪解圖



秋月年次時年辛ニ筆



と詠つて事あらば三月の末は我れと此種を作ふ事あり
かと又雪中ハ馬足をも耕作を馬ハ空へ鹿ホシかわせか車凡
百日あまつて我國小牛の雪の曲がり馬ホシかわせか車のう
嘶マウき路マツルふりんマツルかわせか車を
ひそひそよひよひよひよひよひよひよひよひよひよひよ
所マツルかわせか車馬冬の飼カミひき瘦マツル肥カミひき馬
主マツルの貧カミひき馬の童カミひき雪カミひき外遊
走マツル車カミひき車裏カミひき車裏カミひき冬履カミひき草履カミひき
櫻カミひき此處カミひき雪カミひき世外カミひきの花カミひき視カミひき

阪額野陣之圖

長の太郎
鎌倉より
討手本ら
阪額女大掛
遠く
軍小勝て
野陣を張る
事ハ木文内
あり文もや
けと六令署つ
ことふ一圖を

の

時代ハ
乗車を
觀小供を
けり軍器
の



○ 鶴恩が報也

天保七年丙申の春我が郡中小千谷の縮商人芳澤屋東五郎伊兵衛を
二松といふの商ひの爲西國から來城下の通町の間旅宿の主がさみ
り此近在の農人ある田地のうち病鶴おもて死むるを
見つけ候る人參あへ鶴の病を養ふ日あへを病癒て飛去りけり
天保五年の十月鶴二羽かの農人ふ家の庭から舞ふびう稻二莖を落
一聲づ鳴く鶴さうけの主人拾ひとく見立たぬが六尺かある穗
も是ぶつれ長く穗の一枝ふ稻田五百粒の主人がいへり去年の
病鶴恩が報んひ興國より疊々寄りてある何をかねしめしあり
あひき縮ぬのまへ領主が奉つてゆきぬるにあがむのうちの
まへ主がたまへてゆきぬるにあがむのうちの苗のうへてゆきぬる
種つけぬか鶴があへてゆきぬるにあがむのうちの苗のうへてゆきぬる
一とうのうへ東五郎猶との村の人をも鶴を助けける人を
東五郎が縮を賣る家などある家ふらう猶委く聞ときた國の土
産ふせん穀を一二粒賜へてこそせどわへて越後ハ米のよし國へゆく
ことなづふ生ひゐとて五六粒を「伊を國に持つて事の来由をやて
邦君ふ奉ひを御城内ふ植へて玉ひ東五郎」御褒賞あざむと
小千谷の人をの頃物ぞすりあひのふ余がどんに賤農もかくめども
御代ふ生ひてゐとて安堵一トから筆を採りて一千年的昌平を
いのつゝ鶴の話小筆をあらう猶雪の奇談他事の珍説を小説
する最も多ひ生産の暇あへび編を嗣ぐ

通巻画圖

京水 岩瀬百鶴筆



京山人百樹翁著述目錄

○和漢印章考

五
卷

本朝古印の摸本を圖り制度用格を尋む考證
和漢と目す。朱象賢が印典の作格ふ倣ふ

物語考
五卷

和漢押字考
俗小書判とひよの起原をも
三卷

骨董集三編二
卷四編二
醒齋京傳先生遺稿京山翁增修

女狂考
前後六卷

○
高尾考
同
万総の高尾白刃しらばる死しりといふ毒説を論弁
高尾十一代の傳遺墨遺器まつゆきをうやうやしきも

茶の湯初心抄 同
茶の事を学び此書を寫すとの大恩をもつ
茶席小づきよりて其をえがう心得をもつ

尾羽名古屋本町六丁目
上野東四郎

諸
美濃岐阜米屋町
三伊
浦
源
助
自

美濃大垣伊町
遠州濱松糸屋町
齋藤源利三兵衛

駿州 静岡興眼町五丁目
駿州 沼津淺間町
佐藤俊三郎

國 信 賢 長 野 仁 王 門 前
信 刑 小 諸 荒 町
相 西 澤 吉 太 郎

下總野田五丁目
下總國佐原
朝野利兵衛
林藏

肆書府三

西京寺町通四條
全 寺町通佛光寺上
大坂北久太郎町四町目
全 南久宝寺町四町目
全 備後町四町目
東京芝三崎町
全 通，二町目
淺草茅町二丁目
全 通，旅籠町
本石町二丁目

田中治兵衛
前川勝徳治兵衛
柳原喜兵衛
前川源七郎衛助
田中吉前
稻山中岡平
畠茂兵衛
田佐兵衛
生龜治郎衛
江島喜兵衛
東北澤伊
八衛助郎衛

肆書

常明水井東町
磐城中村字多川
陸前仙臺國分町
陸中一關
羽前山形六日町
岩代福島通五町目
民明
全所
越後長岡
越後高田與麻町
越後四ツ谷濱村
佐藤友吉
水井酒中
多村作
勝太郎
野脩省
小斎藤彦太郎
市村五郎兵衛
柿崎忠兵衛
安右衛門
伊勢市
平吉郎
松信善之助
賀茂卿
及川兵治
市村五郎兵衛
柿崎忠兵衛
安右衛門
伊勢市
平吉郎
松信善之助
賀茂卿

